

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02383

研究課題名(和文) フランスにおけるブルターニュの再話文学の系譜 - 『バルザス=ブレイス』を中心として

研究課題名(英文) the genealogy of literary works based on tradition in Brittany in France focussing on Barzaz-Breiz

研究代表者

大場 静枝(OBA, Shizue)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：60547024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、フランス文学におけるブルターニュ地方の再話文学の系譜を明らかにすることを目指した。そのために民話や民謡の収集が開始された18世紀後半から19世紀に時代を限定し、特に近代ブルターニュ文学の祖と考えられる『バルザス=ブレイス ブルターニュの民謡』を中心に、その位置づけと評価の変遷について検証を行った。その結果、主として民謡や民間伝承から成る当時の地方文学に対する評価がロマン主義の潮流と深く関わっていることが明らかになった。また、研究過程で得られた知見に基づいて詳細な解題を付した、本邦初訳となる同書の翻訳を刊行したことは、本研究の大きな成果の一つである。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to clarify the genealogy in French literature of literary works based on tradition in Brittany. For that we examined how the position and evaluation of these works evolved by analyzing works published from the late 18th century to the 19th century, focusing on folk tales and folk songs, especially Barzaz-Breiz: Chants populaires de la Bretagne, which is regarded as the ancestor of modern Brittany literature. As a result, it became clear that the evaluation of regional literature, mainly folk songs and folklore, is closely related to the trend of romanticism. Also, one of the major achievements of this research project was the publication of the first Japanese translation of this Barzaz-Breiz, with detailed explanations based upon the findings and knowledge obtained in the research process.

研究分野：人文学

キーワード：『バルザス=ブレイス』 ラ・ヴィルマルケ 民謡 ブルターニュ地方 ロマン主義 バルザス=ブレイス論争

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパの民話・民謡作品の系譜を遡ろうとすると、一方でルネッサンスや古典主義時代の空白期間を経て吟唱詩人トルヴァドールが活躍した中世の口誦文学に至り、他方で18世紀後半からヨーロッパ各地で始まる民謡収集の流行に至る。そして19世紀に入りロマン主義文学が花開くと、前世紀の啓蒙主義や理性重視の考え方と対峙するように、「東洋的な感性」「異国情緒」「キリスト教以前の土着的な豊かさ」「古代への憧憬」等の感性が注目され、中世の「ブルターニュもの」(「アーサー王と円卓の騎士物語」を典型とするコンウォール、ウェールズ、アイルランド、ブルターニュなどケルト文化の地域を舞台にした伝承や説話のこと)の再興が見られる。

こうした動きと軌を一にするように、ブルターニュに対して人々がそれまで抱いてきた、陰鬱で貧しい地域という先入観や「反革命の地」という血なまぐさいイメージが薄れ、この地方への興味や関心がより大きく、より好意的になっていった。このイメージの転換に大きな役割を果たしたのがブルターニュ出身の作家たちであり、彼らの作品であった。

このような文学的背景の中で、1839年、テオドール・クロード・アンリ・エルサール・ド・ラ・ヴィルマルケにより民謡集『バルザス=ブレイス—ブルターニュの民謡』(以下、『バルザス=ブレイス』と略記)が発表された。当初、『バルザス=ブレイス』は、文学や芸術あるいはケルト研究の世界においても、熱狂的に迎え入れられた。オーギュスタン・ティエリ、クロード・フォリエル、ジャン=ジャック・アンペールなど当時の最も高名な著述家たちも、こぞって作品への賛辞を惜しまなかった。

その後、民俗学の研究方法が確立していくに従って、その収集手法に対して疑義が唱えられ始め、採集された民謡の「真贋」をめぐ

って「バルザス=ブレイス論争」が引き起こされるようになった。その結果、『バルザス=ブレイス』の「採話」としての価値は低下し、人びとの関心も次第に薄れていったのである。しかしこの論争の過程を今日の視点から眺めると、そこには明らかに一つの認識の欠如が認められる。当時、この作品を「真贋」と見なした人びとは、『バルザス=ブレイス』が文学作品として有する価値、すなわち「再話」を介して生まれる「創造性」という価値に眼を向けていなかったのである。

上記の背景を踏まえ、ブルターニュの「再話文学」(民間伝承を再話することで創作された文学)の系譜を明らかにするには、近代ブルターニュ文学の祖と位置づけられている『バルザス=ブレイス』の評価の変遷、本作が置かれていた当時の状況、「バルザス=ブレイス論争」の経緯と争点、そしてその背後にある文芸運動の潮流と本作との関係を調査することが必要であると考えに至った。以上が本研究課題の着想の背景である。

2. 研究の目的

これまでフランス文学史においては、プロヴァンス文学を除いて地方の文学に言及されることはほとんどなく、また再話文学という概念も存在しなかった。それゆえに、『バルザス=ブレイス』や同時代の「再話作品」の有する極めて繊細な叙情性や感受性は、文学(史)の中に確たる居場所を見出せず、正当な評価を得ることもなく、今日に至っている。

したがって、本研究の主たる目的は、フランスのブルターニュ地方の民話や民謡から生まれた文学作品を新たに「再話文学」として捉え直していくに当たって、近代ブルターニュ文学において極めて重要な作品である『バルザス=ブレイス』の文学的価値を再検討することであった。具体的には、『バルザス=ブレイス』の位置づけと評価の変遷を研究し、フランス文学におけるブルターニュ地方の再

話文学の系譜の端緒を明らかにすることであった。

さらに本研究課題では、これまで文学テキストとしての分析が十分になされてきたとは言い難い『バルザス=ブレイス』のテキスト分析を行い、その文学的特徴を明らかにするとともに、その過程で得られた知見に基づいて、本邦初訳となる翻訳を刊行することも重要な目的とした。

3. 研究の方法

(1) 『バルザス=ブレイス』のテキスト分析

『バルザス=ブレイス』に収録されている民謡の文学的特徴を明らかにするために、同書の民謡のいくつかを個別に分析した。『バルザス=ブレイス』には88編の民謡が収録されているが、その多くがラ・ヴィルマルケの出生地であるコルヌアイユ地方で採集されたものである。そのため、本研究ではコルヌアイユ方言の民謡を中心に、「数え歌」「偽の子ども」「小人」「イスの町の水没」「マーリン」「レス=ブレイス」等の作品を取り上げた。

(2) 『バルザス=ブレイス』の文学的価値の再検討

ポスト・ロマン主義時代における『バルザス=ブレイス』の位置づけ及び同作品とフランス・ロマン主義との関係についての研究を通して、『バルザス=ブレイス』の文学的価値の再検討を行った。本研究は、以下のように段階を追って進められた。

第一段階として、前ロマン主義時代の民謡や民間伝承の扱いについて、イギリスのジェイムズ・マクファーソンの『オシアン』のフランスにおける影響に着目して研究を行った。続いて第二段階の研究では、19世紀前半のロマン主義時代の文学的状況と『バルザス=ブレイス』の受容について考察し、最終段階では、ポスト・ロマン主義時代における同作品の評価の変化について知るために、19世紀後

半の著述家たちの民間伝承に対する認識についての調査を行った。

具体的には、『バルザス=ブレイス』の初版がなぜ熱狂的に迎え入れられたのか、その文学的背景を、18世紀後半の『オシアン』の汎ヨーロッパ的な影響とロマン主義時代のブルターニュへの好意的な見方に着目して考察した。フランスにおける『オシアン』の影響に関しては、ポール・ヴァン・ティーゲムの *Ossian en France* や *Reception of Ossian in Europe* を中心に検討した。一方で、ブルターニュに対する当時のイメージの変化については、ラ・ヴィルマルケが『エコー・ド・ラ・ジュヌヌ・フランス』誌に寄稿したブルターニュに関するエッセイ作品、エミール・スーヴェストルやオーギュスト・ブリズーらブルターニュ出身の詩人や作家たちの故郷ブルターニュへの愛と郷愁を表現した作品、さらにはブルターニュを旅した多くの文人たちの紀行文の分析を通して考察を重ねた。なかでも、ラ・ヴィルマルケの« *Les montagnes noires* », « *Brizeux* », スーヴェストルの *Les derniers Bretons*、ブリズーの詩集 *Marie*、ギュスターヴ・フロベールの *Par les champs et par les grèves* などを取り上げた。

その後、『バルザス=ブレイス』は文学として受容されたにもかかわらず、第三版では民俗学・歴史学・文献学の観点から偽書として扱われるようになるのであるが、同作品の評価の変化について、文学的潮流の変遷や「バルザス=ブレイス論争」を中心に考察した。具体的には、当時、公にされたルネ=フランソワ・ルメン (*Catholicon de Jehan Lagadeuc* の序文) やフランソワ=マリ・リュゼル (*De l'authenticité des chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*)、エルネスト・ルナン (リュゼルとルナンの往復書簡) らの言説を丹念に追った。

さらにポスト・ロマン主義時代における『バルザス=ブレイス』の評価の変化については、

当時の文学的な潮流を検討したうえで、民謡収集を行っていた作家たちの民謡観や民謡を扱った作品の分析を通して考察した。具体的には、ジョルジュ・サンドの *Promenade autour d'un village* やネルヴァルの« Les vieilles ballades françaises », « Chansons et légendes du Vallois » を取り上げた。

資料収集では、レンヌ市立図書館、レンヌ第2大学図書館、フランス国立図書館等において資料調査を行った。

(3) 『バルザス=ブレイス』の翻訳

本研究課題の重要な研究目的の一つである『バルザス=ブレイス』の翻訳については、定期的に研究会を開催することで研究の過程で得た知見を他の研究者と共有し、また翻訳の手法や内容、問題点についても情報を交換し検討を重ねつつ、翻訳作業を進めた。フランスにおいては、『バルザス=ブレイス』の専門家であるレンヌ第2大学のエルヴェ・ルビアン教授から翻訳及び文献調査を遂行する上で、貴重な助言、示唆を受けた。

4. 研究成果

フランスのブルターニュ地方をフィールドとするケルト研究は、これまで主として考古学、歴史学、言語学、民俗学を中心に学際的な視点で行われてきた。そしてどの分野でも必ず言及されるのが、本研究課題の主要な研究対象である『バルザス=ブレイス』である。この作品は全ヨーロッパの文学界でその名を知られるほどの価値を有し、いわばブルターニュ文学の金字塔、再話文学の嚆矢ともなる作品である。しかし残念ながら、これまでこの作品は若干の研究を除き、ブルターニュ文学としてもフランス文学としても、文学の枠組みで研究されることはほとんどなかった。

(1) 本研究課題の成果の一つは、この『バルザス=ブレイス』を文学テキストとして捉え、その分析を行ったことである。88編の民謡の全てを分析することはできなかったが、

第一部の「神話・英雄・歴史の歌と物語詩」の民謡の多くについてテキスト分析を行った。

とりわけ、ラ・ヴィルマルケが熱心に研究を行っていた「マーリン」にまつわる民謡4編については、詳細な分析を行った。マーリンの物語に注目したのは、マーリンが典型的なケルト系伝説であるアーサー王物語群に不可欠な登場人物であること、著者のラ・ヴィルマルケがマーリンに強い関心を抱き、のちに『ミルディンあるいは魔術師マーリンその歴史と作品と影響』（以下、『ミルディン』と略記）と題する研究書を著しているという理由からである。テキスト分析に先立ち、まず物語成立の歴史的背景の研究を行った。その後、『ミルディン』を参照しつつ、『バルザス=ブレイス』におけるマーリンという人物の象徴的意味を考察した

さらに本邦初訳となる『バルザス=ブレイス』の翻訳書『ブルターニュ古謡集 バルザス=ブレイス』（彩流社）を刊行したことは本研究課題の大きな成果の一つである。翻訳においては、テキスト分析の過程で得られた知見を反映させた。さらに翻訳書には、研究成果に基づいた詳細な解題を付した。本翻訳書は、我が国の『バルザス=ブレイス』研究及びブルターニュ文学研究を促進するのに、大いに貢献するものであると考えられる。

(2) 本研究課題のもう一つの研究成果は、フランス文学におけるブルターニュ地方の再話文学の系譜を明らかにするために、『バルザス=ブレイス』の位置づけと評価の変遷を研究したことである。

まず前ロマン主義時代の『オシアン』ブームの検討、次にエミール・スーヴェストルやオーギュスト・プリズーらブルターニュ出身の詩人や作家たちの作品の分析やブルターニュについて言及した作家たちの作品の分析を通して、ロマン主義時代において「ケルト・ブーム」や「ブルターニュ・ブーム」が醸成されていたことを検証し、『バルザス=ブレ

イス』の成功の陰には、ロマン主義的な感性とブルターニュやケルト文化に対する憧憬があったことを明らかにした。

その後、『バルザス=ブレイス』は第三版の刊行時に、民俗学・歴史学・文献学の観点から偽書として扱われるようになり、「バルザス=ブレイス論争」が引き起こされるが、この論争の経緯、背景を当事者の言説を丹念に追うことで争点を明らかにし、なぜ『バルザス=ブレイス』の評価が変化したのか、その原因を検証した。その結果、『バルザス=ブレイス』の評価の変遷には、民謡などを中心とする地方文学に対する評価がロマン主義の潮流と深く関わっていることが明らかにされた。つまり、ロマン主義の終焉から写実主義、自然主義へと至る当時の文学的な状況の変化、民俗学、民謡学などの新たな学問の成立による影響などが、その背景にあることが検証されたのである。

最後に、『バルザス=ブレイス』の同時代及び後世への影響という点では、『バルザス=ブレイス』に言及した人々の言説を見ることで、ブルターニュのみならず、フランスの多くの作家に影響を与えたことが分かった。『バルザス=ブレイス』の影響は「論争」の急先鋒であったリュゼルはもちろんのこと、プリズーヤアナートル・ル・ブラス、あるいはポール・セビヨ、ジョルジュ・サンド、ジェラルド・ド・ネルヴァル、ギー・ド・モーパッサンらにも及んでいることが示された。さらには、この研究により、後の散文の「再話作品」の成立、さらには20世紀初頭のブルターニュの分離独立運動期の文芸や現代のブルターニュ文学に『バルザス=ブレイス』が密接に関わっているという仮説が導き出された。したがって、今後は『バルザス=ブレイス』が後世の文学作品にどのような影響を与えたかを検証することで、『バルザス=ブレイス』に端を発するブルターニュ文学の系譜の確立を目指したい。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

山内淳 「ブルターニュ古謡集『バルザス=ブレイス』魔術師マーリンの影」『日本大学芸術学部紀要』第63号 2016年 pp. 29-36 査読有。

山内淳 「『バルザス=ブレイス民謡集』(抄訳)」『藝文攷』第22号 2

017年 pp. 239-269 査読有

大場静枝 「フランスにおける18世紀後半から19世紀の民謡の位置づけ—『バルザス=ブレイス』の受容の変化をめぐり一考察」『広島国際研究』第23巻 2017年 pp. 61-73 査読有

〔学会発表〕(計1件)

大場静枝 「『バルザス=ブレイス』の受容—文学から民族学への変化について」

日本ケルト学会 第36回研究大会 2016年10月22日 静岡県立大学

〔図書〕(計2件)

大場静枝 「語り継がれる民族の記憶—『バルザス=ブレイス』をめぐって」『祈りと再生のコスモロジー—比較基層文化論序説』2016年 pp. 695-711

ラ・ヴィルマルケ編、山内淳監訳、大場静枝・小出石敦子・白川理恵訳『ブルターニュ古謡集 バルザス=ブレイス』彩流社 2018年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大場静枝 (OBA, Shizue)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：60547024

(2) 研究分担者

山内淳 (YAMAUCHI Atsushi)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：20210320

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()